

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 20日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520556

研究課題名（和文）事態把握の認知枠が第二言語習得に与える影響：英語・日本語・韓国語の  
対照研究研究課題名（英文）Effects of Event-grasping Cognitive Frame on Second Language  
Acquisition: A Contrastive Study of English, Japanese, and Korean.

研究代表者

守屋 哲治 (MORIYA TETSUHARU)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：40220090

研究成果の概要（和文）：

日本語と英語,中国語,韓国語との間には,移動事象に関する認知枠の違いのみならず,テンス・アスペクト,モダリティ,ポライトネスなどの点でも事象をどのような観点から捉えるかという点に関する違いが見られることが明らかになった。さらに,そのような違いが第二言語習得に影響を及ぼしていると考えられるケースがあること,そしてそのような認知枠の違いを明示化することで第二言語学習を容易にする可能性があることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：

It has become clear that between Japanese, English, Chinese, and Korean, differences in cognitive frame exist not only in how we grasp motion events but also in other cognitive areas like tense-aspect, modality, and politeness. Furthermore, we have pointed out that these differences sometimes have influence on second language acquisition. We suggested that making these cognitive frames explicit can facilitate second language learning.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：対照言語学

科研費の分科・細目：言語学・英語教育

キーワード：認知枠,第二言語習得,テンス,アスペクト,モダリティ,日本語,韓国語,  
中国語

## 1. 研究開始当初の背景

言語知識を、他の認知能力から独立した生得的体系と捉える生成文法は理論が高度に抽象化し、扱う言語データも実際の使用例で

はなく理論的検証のための作例および研究者自身の内省による適格性の判断が中心となることによって、第二言語習得の研究者や、外国語教育の実践者達にとってはその成果が利用しにくい状態になってきた(Ellis

1994)。一方、1990年代以降に研究が活発化してきた認知言語学では、言語を一般的認知能力の中で位置づけることによって、実際の使用法や文脈などを重視した言語理論を立てており(Tomasello 1998, Bybee 2006)、第一言語習得だけでなく、第二言語習得や外国語教育への応用も議論されている (Pütz, Niemeier, and Dirven 2001, Robinson and Ellis 2008, Holme 2009)。後者の研究動向は「応用認知言語学 (Cognitive Applied Linguistics)」と呼ばれる(荒川・森山 2009)。

応用認知言語学研究においては、認知言語学の枠組みで提唱された概念(例:プロトタイプ)の個々の語彙項目、文法項目の習得や教育への応用はもとより、事態を把握する認知的枠組みの違いが言語習得に与える影響も論じられてきた。例えば、日本語のように事態を「状態」的に把握しようとする「なる」型言語と、英語のように事態を「動作」的に把握しようとする「する」型言語(池上 1981, 2006)の違いや、英語のように移動動詞の方向・経路が不変化詞で表される傾向のある「衛星枠付け言語」と日本語やスペイン語のように移動動詞の方向・経路が動詞で表される傾向のある「動詞枠付け言語」の違い(Talmy 1985)などが、第二言語習得の際に影響を及ぼすことも明らかになっている(Slobin 1996, 1998, 2000, Cadierno 2008)。また、先駆的研究として、英語のような「書き手(話し手)責任言語」と日本語のような「読み手(聞き手)責任言語」という認知スタイルの類型と第二言語習得への影響を指摘した Hinds (1987)がある。

応用認知言語学的な研究の萌芽は、日本の認知言語学研究者の中でも見られ、イメージ・スキーマを利用した可算・不可算名詞の教育の実践例(岸本 2007)や、認知言語学の第二言語としての日本語の格助詞指導への応用例(森山 2006, 2008)などが散見される。しかし、特に、個々の文法項目を越えた、事態把握の認知枠の違いが、語彙や構文の選択にどのような違いをもたらすかという点についての実証的な研究は、中国語母語話者の日本語作文を通じた認知スタイルの分析(近藤ら 2009)などの一部の研究を除き、まだ体系的に着手されているとは言い難い。

## 2. 研究の目的

認知言語学の枠組みの中で提唱されてきた言語タイプの違いが、日本人の外国語としての英語習得にどのように影響を及ぼしているかを検証していく。それを踏まえて、異なる認知フレームを持つ言語を第二言語として習得するプロセスでは構文や語彙の選

択に際してどのような問題が生じるのかを双方向的な対照研究を行うことによって明らかにする。さらには、そのような問題点を整理した上で、どのような外国語教授法がそれらの問題を克服するのに適切であるかに関して提案を行い、英語教育やその他の第二言語教育の現場への還元をする。

## 3. 研究の方法

研究代表者は、研究全体の統括をすると同時に、日本語を母語とする英語学習者(日本人大学生)のライティングのデータを収集し、日本語の事態把握の仕方がどのように影響するかを分析する。研究分担者は英語、韓国語を母語とする日本語学習者(外国人留学生)のライティングのデータを収集し、学習者の母語の事態把握の仕方がどのように影響するかを分析する。

さらに研究代表者は、テンス・アスペクト、モダリティ、否定辞繰り上げなどの観点から日英対照を行い、その体系的相違の要因が、第二言語習得にどのような影響を与えうるかを具体的に考察する。

一方、研究分担者は、日本語と中国語、韓国語を対象に、モダリティ、ポライトネス、名詞化構文などの観点から対照研究を行い、第二言語習得への影響を理論的に考察する。

これらと並行して、認知言語学の研究動向および認知言語学の第二言語習得理論および言語教育への応用に関する研究動向について調査を行う。

## 4. 研究成果

日本人英語学習者のライティングデータを元にした研究では、テンス・アスペクトに関してどのような誤用が傾向として多くみられ、そこからどのような認知枠の違いがみられるのかについて分析を行った。

テンスに関する誤りは単文構造におけるよりも、複文構造中で多くなることがあきらかになった。これは複文構造における主節と従属節の関連付けの仕方が、日本語は主節の事象の時点を基準とする、アスペクト的な性質を持つのに対して、英語は、一部のケースを除き発話時を基準とする体系になっているためであり、このような認知枠の違いを何らかの形で明示することで、このような時制に関する誤りを減らせる可能性があることを指摘した。

アスペクトについては、日本語の「ている」の表しうる意味領域が英語においては複数のアスペクト表現の意味領域と重なっていることから多くの誤用が起きることが明ら

かとなり、この点でも教育現場における認知枠の相違の明示の必要性を訴えた。

モダリティの日英語対照については、英語などの西洋語ではモダリティを表す助動詞が義務的 (deontic) 意味から認識様態的 (epistemic) に拡張したと指摘されているのに対し、日本語ではそのような意味拡張が起こった証拠はなく、むしろ多くのモダリティの助動詞が最初から、義務的意味や認識様態的意味を含む多義的な性質を持っていたことを指摘した。これは、日本語の助動詞がもともとは義務的や認識様態的などの意味を表していたのではなく、それらの意味とスキーマ的關係にある「非現実相 (irrealis)」を表していたと考えたと自然に説明できるとし、モダリティの本質を非現実相の表現とする考え方の妥当性を示した。このことは、動詞からモダリティの助動詞を発達させた英語などとはことなる視点からモダリティを捉えていることになり、外国語学習におけるモダリティの習得研究などにも理論的示唆を与えるものである。

否定辞繰り上げ現象に関しては、英語が think, believe などが否定辞繰り上げを可能にする主節述語になるのに対し、日本語では「思う」が否定辞繰り上げを許容する一方で「考える」は否定辞繰り上げを許容しないという対比を取り上げ、この違いは、中間尺度の原理や短絡化された推論といった先行研究の提案では解決できないことを指摘した上で、否定辞繰り上げを文法化のプロセスの結果生じた構文と見ることで、各言語における否定辞繰り上げを許容する主節述語の多様性が予測できることを主張した。この研究は、日英語ともに存在する構文であっても、その構文の動機付けのレベルにまでさかのぼることによって、両言語における細かな点の相違が説明できるということを示した点で、言語教育に対する示唆を与えた。

日本語母語話者と中国語母語話者の移動事象表現の習得の差異に関する研究では、移動事象の認知枠の違いが、実際にどのような移動事象表現の語彙・構文選択を行うかという点に実際に影響を与えていることが明らかになった。

日本語と中国語のモダリティ体系の違いについては、日本語がもともと義務的意味や認識様態的意味を分化しない表現形式であったところから、それぞれの意味を表すモダリティ表現が発達したのに対し、中国語のモダリティ表現は義務的意味から認識様態的意味の拡張が見られるという違いが存在するが、その違いによって中国語母語話者の日本語習得に影響が出ていることが明らかになった。

日本語と韓国語、中国語のポライトネスに関する対比では、日本語と韓国語の文末表現

の違いに着目して、文法と語用論の相互作用の点でどのような事態把握の認知枠の違いが存在するかについて研究を行った。日本語、韓国語、中国語などには、共通して名詞を述部に置く名詞述語構造がみられるが、これらの言語の中では、日本語における使用頻度が他の言語よりも圧倒的に多いということがわかった。この違いは、日本語が、对人的配慮を重視するという観点から、述部に動詞や形容詞を置くよりも、名詞を置くことで、聞き手に語用論的な推論による意味解釈の余地を増加させようとする動機付けが働いていることを、韓国語との具体的なデータの対比によって明らかにした。

名詞化構文の日本語と韓国語の対照研究では、日本語と韓国語で同じように存在しているように見える主要部内在型関係詞節でも、文法構造とそれが示す機能の対応関係には体系的な違いがあることを示し、この体系的な違いが認知枠の違いにつながるものとして捉えられる可能性を示した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① Horie, K., The Interactional Origin of Nominal Predicate Structure in Japanese: A Comparative and Historical Perspective, *Journal of Pragmatics*, 査読有, 44, 2012, 663-679  
DOI:10.1016/j.pragma.2011.09.020
- ② 守屋哲治, 日英語の時制体系の対照言語学的研究: 英語学習者の誤用の傾向を踏まえて, *金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要*, 査読無, 4, 2012, 85-96
- ③ 堀江薫, 言語類型論, *日本語学*, 査読無, 30, 2011, 76-85
- ④ Horie, K., Versatility of Nominalizations: Where Japanese and Korean Contrast, *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives*, 査読有, 2011, 473-497
- ⑤ 金廷珉, 堀江薫, 「のだ」構文の談話機能に関する対照言語学的一考察—韓国語の「KES-ITA」との対比を通じて, *日本語学と日本語教育*, 査読有, 5, 2010, 75-190.

[学会発表] (計 7 件)

- ① Moriya, T. Horie, K., Neg-Raising Phenomenon as a Product of Grammaticalization, *The 5th International Conference on New*

Reflections on Grammaticalization 5,  
2012. 7.18, University of Edinburgh  
(England)

- ② An. H., Horie, K., The grammaticalization of a Korean 'receive' -verb badda: A contrastive study with Japanese, The 5th International Conference on New Reflections on Grammaticalization 5, 2012. 7.19, University of Edinburgh (England)
- ③ 堀田智子, 堀江薫, 日本語学習者の「断り」行動におけるヘッジの考察－中間言語語用論分析を通じて, 第22回第二言語習得研究会大会, 2011年12月10日, 国際交流基金日本語国際センター(埼玉県)
- ④ 古田朋子, 堀江薫, 非日本語母語話者のポライトネス・ストラテジーの変化－談話完成テストから－, 第28回社会言語科学会研究大会, 2011年9月17日, 龍谷大学(京都府)
- ⑤ 守屋哲治, 日本語モダリティ体系の特異性と一般性: 歴史変化・対照言語学の観点から, 第26回上智大学言語学会, 2011年7月30日, 上智大学(東京都)
- ⑥ 堀江薫, 「文の終結生」の観点から見た日本語スピーチレベル: 対照言語学・談話機能の観点から, 第7回日本語実用言語学国際学会, 2011年3月5日, サンフランシスコ州立大学(アメリカ合衆国)
- ⑦ 堀江薫, 日本語と中国語のモダリティ体系の認知類型論的対照－中国人学習者の日本語習得過程の考察に基づいて, 中国語話者のための日本語教育研究大会第17回大会, 2010年12月17日, 名古屋大学(愛知県)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

守屋 哲治 (MORIYA TETSUHARU)  
金沢大学・学校教育系・教授  
研究者番号: 40220090

### (2) 研究分担者

堀江 薫 (HORIE KAORU)  
名古屋大学大学院・国際文化研究科・教授  
研究者番号: 70181526